

小蓮華山（長野県）における雪崩事故（2018年1月20日）の調査報告

○出川あずさ（日本雪崩ネットワーク）

1. はじめに

2018年1月20日、12時30分頃、長野県・白馬連峰にある小蓮華山・船越ノ頭付近にて山岳滑走をしていたスノーボーダー1人が雪崩を誘発し、死亡する事故が発生した。当該グループのメンバーおよび初動捜索救助活動を指揮した山岳ガイドへの聞き取り調査を実施したので報告する。

2. 雪崩データ

種類は面発生乾雪表層雪崩であり、地形局所に形成したウインドスラブであった。規模はサイズ2（流下距離 800m）。破断面の標高は2,550m、方位は南東、スラブは幅30m、厚み20～70cm（堆積区からの目視での推定）であった。破断面での積雪断面観察は実施していないため、弱層等は不明である。

3. 行動概略

経験ある3人の滑走者の内、1人が稜線付近から斜面に滑り込むと、すぐに雪崩を誘発し、完全埋没した。残された仲間2人と近傍にいたガイド・パーティが初動捜索を実施したが、埋没者の雪崩ビーコンの電源が入っていなかったため、途中でプローブによる捜索に切り換えられた。最終的に山スキーヤー等、約30名が捜索活動に関わり、発生から約1時間20分後に要救助者を掘り出した。被害者は既に心肺停止であったが、県警ヘリコプターの到着まで約1時間、現場に居合わせた医師の指導の下、CPRが続けられた。その後、ヘリコプターが飛来したが気象状況により、翌21日に搬出は行われた。

4. 教訓と課題

4.1 雪崩ビーコンの機能確認

入山時にトラブルがあり、通常、実施している雪崩ビーコンの確認作業が、適切に行われなかった。

4.2 ゴースト現象の発生

身に付けた電子機器などの電磁波が雪崩ビーコンに影響を与え、実際には発信状態のビーコンがないにも関わらず、捜索モードのビーコンに数字が表示される「ゴースト現象」が発生する可能性があることが、実務者の間ではよく知られている。この現象が

捜索現場で発生し、初動活動に影響を与えた。今回の事故はゴースト現象が実際の捜索現場で確認報告された国内最初の事例となった。

4.3 雪崩エアバッグ

被害者はエアバッグを使用していたが、適切に展開させることができていない。このため、浅い埋没深であったものの、雪面に手がかりがなく、プロービングによる長時間の捜索活動が強いられた。



写真1 山岳エリア全景（撮影日は事故以前）



写真2 事故現場全景（黒丸が埋没位置）

5. まとめ

小蓮華山の事故は雪崩捜索救助に関して、いくつかの重要な教訓を残した。昨秋、山岳に係る主要6団体によって日本雪崩捜索救助協議会が設立されている。弊団体ではこの協議会を通して、これら教訓や課題に適切に対処し、雪崩安全活動を進めたい。なお、調査報告の作成にあたり、カナダ山岳ガイド協会の Marc Piche 氏に深く感謝の意を表す。